

加害と被害—中国の旅から

宮崎 敦子

1981年8月。私は民間の教育団体が企画した「東西ヨーロッパの旅」で、冷戦下の西ベルリンから、壁の向こうの東ベルリンに入ったバスの中にいた。東ベルリンに入ったバスに、ビシッと制服を着た女性係官が入ってきた。彼女は、息の詰まるような緊張感を振りまきながら、私たちツアー客の一人一人のパスポートをチェックしていった。やがて、彼女が立ち去ると、車内のあちこちから安堵の音が聞こえてきた。

バスは間もなくベルリン市内へ。その整然とした街並みは、つい先ほどまでいた西ベルリンとは異質のものであった。私がこの時感じたのは、敗戦そして冷戦によって国を分断されたドイツの悲劇であった。

ところが、数日後に訪れたポーランドでは、ドイツはナチスドイツとなって私たちの前に現れた。

同じようなことが今回の旅でも起こった。日本国内では空襲・沖縄戦・広島そして長崎と第二次世界大戦の惨状が語り継がれていく。しかし、ひとたび日本からアジア・中国に足を踏み入れたとたん、日本は日本帝国主義となって私たちの前に現れる。

今回の中国への旅に際して、私は一つの課題を抱えていた。それは、知り合いの中国・韓国の留学生から受けた質問だった。(注1) 私は、今年の三月まで公立中学で社会科の教員をしていた。授業の一環として生徒に祖父母からの戦争体験の聞きとりをさせて、その体験や感想をまとめる取り組みを続けてきた。私は、それを平和教育と位置づけて彼女たちに紹介したところ、すぐさま、「平和教育って何ですか」と質問された。反戦・平和を自明のこととしていた私にとって、戸惑いを感じたが、否、かつて日本に侵略され、植民地となった歴史を持つ彼女たちにしてみれば、祖父母(日本)の被害を聞きとる学習が平和教育とは・・・確かに無理からぬ話である。

かつての「日本帝国主義」がなぜ平和教育なのか、その溝をきちんと丁寧に説明する必要がある。しかし、どのようにして・・・私は、そのヒントを今年の夏、岩波ホールで上映された「遙かふるさと 旅順・大連」にみた思いがした。作者の羽田澄子さんは次のように語っている。

「旅順が懐かしいのは、戦争中にもかかわらず、私たち一家4人が平和で楽しい時を過ごした場所だったからなんですね。それは中国人の苦しみの上にあったわけですが、当時の私は気づかなかった。それを描かないと話が成り立たないと・・・」(2011年7月4日・朝日新聞より)

加害と被害、日本は、戦後に生きる私たちは、その両輪を背負っている。そして、加害の事実が、私たちの憲法を作らせたこと、9条は日本の平和を保障するものではなく、かつて日本が戦争を拡大していったアジア諸国に対する平和の保障であることを。(注2) そのためには、戦争を「しない」という決意だけではなく、主権者の私たちが戦争を二度と国家に「させない」という強固な自覚と行動を持っていることを、丁寧に、粘り強く語っていかねばと思う。

(注1) 私がいま在籍する大学には韓国、中国等アジアからの留学生が多い。私の知り合いの留学生は、教育をはじめ、日本の植民地支配について研究している。

(注2) 渡辺治 「講座憲法学 第1巻」 「日本国憲法運用史序説」より

記

中国に出発する二日前、私は三十年前の教え子と再会した。

李 君江。1982年、日本人の祖母らと共に、残留三世として、私が勤務していた埼玉県東松山市の中学校に中学二年生として転校してきた。

しかし、言葉の壁、慣れない日本での生活、彼女は不登校となり、中三の時にはほとんど学校に来なくなってしまった。李は卒業すると、就職して定時制高校に通った。私も、彼女の卒業の年に県南の中学校に転任し、それから30年の歳月が流れた。

「先生、李が大変だよ。入院しちゃったよ」、突然、李と親しかったA子から電話がきた。A子は中学卒業後、李と同じ職場に入り、以来時々連絡をとっていたらしい。数年前にすい臓がんが見つかり入院。手術をしたものの、やがて肝臓に転移。今年の3月には、母親と中国・北京に治療に行ったようだ。しかし、6月に帰国。再び、最初に掛かっていた病院に戻ったとのことだった。

私は、A子から聞いた病院に向かった。

横になっていた李は、ベッドから体を起こして私を迎えてくれた。最初、私のことを思い出せないようだったが、当時、新任で先輩教員の中でオロオロしていた私のことを少しずつ思い出してくれたようだった。

それにしても、あの色白の、ふっくらとした頬をした李。「日本に来たくなかった」と私たち担当学年の教員に訴えた李はどこにいったのだろうか。私がいる間にも、看護師が痛み止めを持ってきた。李が中国に行ったのは、中国の漢方での回復を期待したようだった。しかし、日本と変わらない治療の在り方と、残してきた子どものこと(22歳男子と18歳女子高三)、さらに言葉の問題もあり、3か月で日本に帰ってきたのだという。

李が中国に発ったのは、3月11日、震災の日であった。もう数時間、出発時刻が遅かったら李は中国に行けなかったかもしれない。

「何かが、きっと李を30年ぶりに中国に帰らせたんだね。」私は、李に言った。そして、二日後に、今度は私が中国・長春・瀋陽・大連にいくと伝えると、李は「大連は私が生まれたところ」と驚いた様子だった。私は、「大連の写真をいっぱい撮ってくる」と約束した。

初めての中国旅行。私は、李に見せる写真を撮りまくった。

しかし、日本に帰って三日後。A子から李が亡くなったとの知らせを聞いた。二人の子どものことを案じ、特にまだ高三の娘は「勉強が好きで、薬剤師になりたがっている。でも、今の状態では・・・」と、心残りだっただろう。

私は、この紙面を借りて李のことを記しておきたい。李 君江という我慢強い、優しい母であり、女性がいたことを。しかし、もう止めてほしい。人の人生が、国家によって、歴史によって翻弄されることを……。李は、日本のことをどう思っていたのだろうか……。

(みやざき・あつこ： 1956年島根県出身。1980年より埼玉県の公立中学校に勤務。2011年3月、早期退職をして、現在早稲田大学大学院で教育学・教師論を専攻)